

学びを促す教師のかかわりに関する学習臨床的研究

金崎 鉄也 (石川県珠洲市立正院小学校)

要約

学習の不成立や学級崩壊が大きな教育問題となっている。本研究は、どのような教師のかかわりが教室に学びに向かう雰囲気形成し、学びを構築できるのかを明らかにすることを目的として、教室の実際場面を多岐にわたって分析した。その結果、学びを構築する教師のかかわりは、学習集団に対する状況の把握、更新性、目標の共有化と合意形成、対話的關係性、個と集団への同時対応などであることが明らかになった。教室に学びを構築する教師のかかわりは、学びの対象を組織する、学びを組織する、相互交流を組織する、の3つのいずれかに成功することであるといえよう。

[キーワード] 教師のかかわり 実践的指導力 教室の雰囲気 学びの構築 実践知

研究の目的

授業が行われている教室に入った瞬間に、教室の雰囲気が学習に前向きであったり、集中度が高いと感ずることがある。また、逆に注意が散漫で学習に向かっていると感ずられる学級の雰囲気もある。このような教室の雰囲気は、学級集団を構成する子どもたちと指導する教師との日常的なかかわり合いや日々の学習活動の展開によって形成されるものと考えられる。

本研究は学習臨床的アプローチとして、教室の実際場面を多岐にわたって分析し、どのような教師のかかわりによって教室に学びに向かう雰囲気がつくられ、学びを構築できるのかを明らかにすることを目的とする。

研究の方法(手続き)

1) 調査校について

・調査 (2002年5月～6月) 複数の学校ⁱⁱ⁾の複数の教室を参観し、教室の雰囲気を調査した。

・調査 (2002年6月～9月) 調査のなかで、教師のかかわりによって教室の雰囲気がもっともよいと判断した教室を継続的に参与観察し教師のかかわりを分析した。A小学校5年*組(B教諭)

・調査 (2002年9月～12月) 総合的な学習の時間で異学年のテーマ学習について、自らすすめる学びの様相と教師のかかわりに着目して継続調査した。E小学校異学年(3年～6年)5教室

・調査 (2003年5月～6月) 筆者の授業実践VTRから、長期スパンと短期スパンで記録された2事例(2002年11月および1995年度4月～3月)を取り上げ、複数の視聴者によって共同分析ⁱⁱⁱ⁾し、教室の雰囲気の変化と教師のかかわりについて考察した。

・調査 (2003年6月～8月) 筆者の教科の授業と家庭学習をつなぐノート指導の実践^{iv)}によって書かれた学習ノートから、抽出児童のノートをその記述量とその内容、方法の1年間～2年間の変化に着目して分析し、教科

の学習における教師の長期的なかかわりについて考察した。

2) 調査方法について

調査～は授業場面をVTRなどで記録し分析した。調査はVTRとCTRに記録し、事後のアンケート調査を児童と教師に行った。調査は、記録されてあったVTRを複数で視聴して共同分析した。調査は保存してあったおよそ100冊のノートと現在成人しているノートの作者に追跡調査・面接調査を行った。

研究の結果と考察

1) 調査(複数の教室の比較)

VTRに記録された一斉指導場面で、教室の学びの雰囲気レベルを検討した。その結果を特徴的な3つの教室で比較した。レベル4の教室の担任B教諭は、「担任当初から問題意識を持ち、子どもたちとの呼応関係を育てるための工夫を行ってきた」といい、その結果が同一学校同一場面における他の教室との雰囲気の違いにつながったと推測された。また、レベル1の教室のC教諭は、「他から見れば学級崩壊だろうが、子どもたちのエネルギーを全身で受け止めている」という見解を示し、改善の意志を持っていなかった。このことから、学習者の学びの状況をとらえ、よりよく現状を更新していこうとする教師の姿勢の重要性が指摘される。

2) 調査(優れた教師のかかわり)

A小学校5年教室とB教諭の参与観察(国語科「海にねむる未来」他12単位時間)

B教諭のかかわりの顕著な特徴を列挙する。

- ・「教室の呼吸を整える」
- ・「学ぶ意義、目標・課題の明確な提示」
- ・「共有化と合意形成」
- ・「個と集団への同時対応」など

B教諭の発話は、問いかけ・呼びかけ・提示が主になっており、賞賛・肯定と評価に特徴がある。教室空間が対話的關係になっており、子どもたちの意思を反映しな

から学習をすすめている。また、教えるための説明や発問がほとんどなかった。一人の発言を受けながら全体に対して目を配り、個と全体に同時対応している。そして、個の意見を他の意見と関係づけ比較しながら全体に問い返すことで周辺との交流を促し、学びを教室全体のものとしている。

3)調査 (テーマ学習)

授業の冒頭の「本日の活動の確認」と、授業の終わりの「ふりかえり」では担当教師がそれぞれのやり方でかかわっていた。そのかかわりと子どもたちの学習活動の展開とを対応させると、教師の子ども - 子ども間の相互交流を促す「対話的關係」のによるわかちあいや共有化を図るかかわりが学び合いの学習活動を促す結果となった。

また、アンケート調査の結果では、日ごろの教科の学習の充実感が総合的な学習の時間の意欲を高め(低め)、自ら学ぶ学習活動の充実にもつながっていることが明らかになった。

4)調査 (実践例;授業場面から)

長期にわたる学びを促す教師のかかわりが、学びに向けた雰囲気を上向きに変容させていくことが明らかになった。また、1時間の授業の中にも学びに向かう雰囲気があって、教師のかかわりによってその雰囲気を促進することができることが明らかになった。学習集団の学習にのぞむ雰囲気を質的に高めていくことができるといえよう。

5)調査 (実践例;ノート指導から)

授業で問いを探究する共同学習は、自ら問いを生んで自ら学んでいくノート学習につながった。成人後の感想から、「与えられたものをやっていた」学習から「自分で考えてやる」学習に変わることで、“学習とは自分が考えてやっていくもの”という認識に至り、教科の学習においても自ら学ぶということを実現できるといえよう。

総括的考察

学ぶ雰囲気が形成されている教室には、教師と学習者、学習者間の相互作用によって、教室に学びが構築されている。

まず、調査 と調査 と調査 では、学びに向けた雰囲気を形成していくには、教師の現状把握とよりよい学びを求める志向性のあることが分かる。学びに向かう雰囲気がない教室であっても教師に問題意識がなく、それを改善する意志がなければ変わりようがない。現状をさらによくしていこうとする更新性が教室を上向きに変えていく原動力になる。そして、学びに向かう雰囲気

は、時間をかけて質的に高められるのである。

調査 のB教諭のかかわりは、融和的な信頼関係をもとに相互関係性を高める授業展開である。調査 の筆者の学習者を引っ張るかかわりと異なる。教師のかかわりはその個性によって当然変わるものである。しかし、共通項として一人ひとりの学習状況と集団としての学びの成立に対する見目、状況把握と問題意識、そこからよりよく改善しようとする更新性、なんのために学び、何を学習するのかといった、学びの意義・学習目標・目的の明示、集団として共同的な学びにつなげる目標の共有化・合意形成、共同的学習に向かう対話的關係性、個と全体への同時対応と周辺となる学習者との相互交流を促すかかわりが、教室に学ぶ雰囲気を形成し学びを構築していくのである。

また、調査 では、放任的になりがちな総合的な学習の時間における自ら学ぶ学習においても、普通の教室での学習の充実感が意欲を高め、事前事後の教師の対話的な相互交流を促すかかわりが学びの展開に影響していくのである。調査 では、問いを生じる探究的な共同学習が、教科の学習においても自ら学ぶ態度を育てた。

これらの結果から、教師のかかわりは次の3つ、

- (1)学びへの対象を組織すること
- (2)学ぶことを組織すること
- (3)学習者の相互関係を組織すること

に集約されると考えられる。

今後の課題

それぞれの調査のデータを整理し、客観性を担保しながら、教師のかかわりの過程をさらにきめ細かく明らかにし、教員の実践的指導力の考察を深めていきたい。

i 『授業を変える - 認知心理学のさらなる挑戦』米国学術研究推進会議 森敏昭・秋田喜代美監訳 北大路書房 2002; p285「成功した創造的な教育実践を研究する 教室で営まれている学習過程を研究することによって研究者は従来の学習理論の修正を迫られるであろう。」

ii 参観の機会が得られた近隣の2県内のA小学校(公開研究発表会)・B小学校(公開研究発表会)・C小学校(公開研究発表会)・D小学校(一般授業参観)を調査校とした。

iii エリックソンらは2名以上の分析者の分析によって8割以上一致していればそれが正しい分析と認めることができるとしている。(Ericsson.K.A,simon.H.,Protocol analysis-Verbal reports data,MIT Press,1984.) 共同分析者は、学部生2名、学卒院生2名、現職院生3名、大学教官1名の8名である。

iv 自学ノートの実践は、1990年度から2000年度まで学級担任した9クラスで行っている。そのうちノートが最も多く保存された1992~1993年度担任の1クラスの児童について調査対象とした。(成人後の追跡調査を含む)